

## 2022 年度 小委員会活動成果報告

(2023 年 1 月 17 日作成)

小委員会名	キャンパス・リビングラボ・デザイン小委員会	主 査 名：小篠 隆生 就任年月：2021 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	都市計画委員会	委員長名：野嶋慎二
設 置 期 間	2021 年 4 月 ～ 2023 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>大学キャンパスを利用したリビングラボ*による持続的な空間形成・発展メカニズムは、まさに現在の都市にこそ必要不可欠かつ重要な要素であることから、本小委員会の設置目的は、キャンパスが都市デザイン創出の実験場であることを最大限生かし、新たな都市生活に必要な空間づくりの方法論を、都市に対し実践的に提案することである。</p> <p>初年度：【After コロナにおける生活圏の空間計画のあり方検討】</p> <p>①2020 大会の中止で延期になった研究懇談会（都市と大学のリデザインに向けたリビングラボラトリの可能性）の実施による論考</p> <p>②学会大会時にオーガナイズドセッションの企画、開催による討論と問題解決のための方向性の模索</p> <p>③キャンパス利用実態調査の取りまとめと論文発表</p> <p>2 年度：【After コロナにおける生活圏の空間計画・設計手法の検討】</p> <p>①学会大会時にオーガナイズドセッションの企画、開催</p> <p>②公開連携研究会の開催</p> <p>研究会もリビングラボの仕組みを利用し、市民、大学、企業、行政など異なる立場の参加者を交えて開催し、生活圏における空間デザイン手法の検討。前小委員会も含め 4 年の活動総括と課題抽出。</p> <p>*リビングラボとは「生きた実験室」と直訳できるが、実験的・構築的プロセスを含む大学と都市の相互作用の場と定義でき、多様な主体が計画・企画などプロジェクトに主体的に関わる都市デザインのプラットフォームとして捉えられる。</p>	
委員構成 (委員名 (所属))	<p>委員公募の有無：有</p> <p>主査：小篠隆生（北海道大学） 幹事：安森亮雄（千葉大学） 吉岡聡司（大阪大学）</p> <p>委員：池見祥見（大阪大学） 岩崎克也（東海大学） 小貫勲子（東北大学）</p> <p>小野尋子（琉球大学） 笠原 隆（文部科学省） 斎尾直子（東京工業大学）</p> <p>土田 寛（東京電機大学） 恒川和久（名古屋大学） 平 輝（東京工業大学）</p> <p>福島孝則（東京農業大学） 葉袋奈美子（日本女子大学） 脇坂圭一（静岡理工科大学）</p>	
設置 WG	なし	
2022 年度予算	220,000 円	ホームページ公開の有無： 委員会 HP アドレス： <a href="http://news-sv.aij.or.jp/toshi/sl/Campus/Home.html">http://news-sv.aij.or.jp/toshi/sl/Campus/Home.html</a>

項 目	自己評価
委員会開催数	5 回（年度内計画を含む）7/15,9/07,11/19,12/6,3/25
刊行物	
講習会	
催し物	1. 公開研究会「キャンパスで実証された空間計画の方法論 -キャンパスリビングラボデザイン ゆくえ-」（2023.03.25 開催予定） 参加者数 60 名
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	<p>1. 公開研究会「大学と地域の新たな連携—地域連携からキャンパスリビングラボへ—」を 2022 年 3 月に千葉大学墨田サテライトキャンパスで実施。オンライン参加 21 名。会場参加 31 名。キャンパスは新たな計画の方法論を生み出すポテンシャルをもち、そうした計画におけるパブリック・コモンスペースの意味がこれからのアーバンデザインを考えるヒントになりうるということが議論された。</p> <p>2. 2022 年大会ではオーガナイズドセッション「キャンパスのリビングラボが貢献する都市空間デザインの計画論・実践論とは？」を企画し、10 題の論文が発表された。キャンパスで行われているリビングラボの実態が広く明らかになった。</p> <p>以上の成果は、活動目標をほぼ達成する成果といえるが、最終の取りまとめを 3 月の公開研究会で行う予定である。</p>
委員会活動の問題点・課題	<p>1. コロナ禍で見学会などの実施がまだ、以前のようにできていない。2022 年 3 月に、公開研究会と共に、千葉大学墨田サテライトキャンパスで実施したが、本年度は未実施。</p> <p>2. 次期に向けた小委員会のあり方の検討</p>